

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520374

研究課題名（和文） ラオ語におけるいわゆる補助動詞の認知言語学的視点からの研究

研究課題名（英文） A Study of so-called subsidiary verbs in Lao from the point of view of Cognitive Linguistics

研究代表者

鈴木 玲子（SUZUKI REIKO）

東京外国語大学大学院 総合国際学研究院 教授

研究者番号：40282777

研究成果の概要（和文）：

本研究は、ラオ語コーパスの構築に努めると同時に、そのコーパスデータを利用し、ラオ語のいわゆる補助動詞について認知言語学的視点から検討を行った。

全4年間の研究のうち、平成20年度と21年度は主にラオ語の資料収集とそのデータベース化を行い、平成22年度および23年度は引き続きデータベース化を行うと同時に、得られた資料を利用して、補助動詞的な語の検討を行い、その成果を論文や学会を通して発表した。特に最終年度の平成24年2月には協力者であったラオスの研究者とともにコーパスデータを利用したラオ語研究についての研究会を開催した。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I constructed the corpus of Lao language and studied so-called subsidiary verbs in Lao from the point of view of cognitive linguistics using those corpus data. During the period of 4 years, I spent the first two years for collecting data of Lao language and compiling these data. For the subsequent two years, I finished compiling the data and studied on subsidiary verbs by using the obtained data. I presented my results as published papers or in academic conferences. Especially in February, 2012, the final year of this project, I held a study meeting on Lao language that utilized the compiled corpus data with Lao researchers who collaborated with me.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語学・外国語・ラオ語・コーパス・動詞連続・意味拡張・孤立語・東南アジア大陸部

1. 研究開始当初の背景

(1)研究背景

ラオ語は、タイ・カダイ(Tai-Kadai)諸語南西タイ(Southwestern Tai)語群に属し、ラ

オス人民民主共和国の公用語である。その言語学的特徴は、他の南西タイ語群に属するタイ語(Thai)やルー語などと同様に、単音節声調言語で、類型論的には語形変化をしない

孤立語であり、固有の文字を持つ。ところがラオスでは 20 世紀における長い戦争や内乱とその後の政治的および経済的制約により、現状ではラオ語は公用語であるにも関わらず、近隣諸国の主要言語であるタイ語やベトナム語などと異なり、研究者も少なく、研究資料及び環境ともに充実していない。

近年のコンピュータ界の急速な利用拡張によって、さまざまな言語で大規模な資料のデータベース化が行われている。そしてさらには言語コーパスを利用したコーパス言語学という観点からの研究も盛んになった。しかしながらラオ語に関しては、国内外においてまだ言語研究に利用できるような規模の言語コーパスは存在せず、言語資料と言えるべきデータが個人的にごく小規模で散在している限りである。

(2)言語学上の課題

ラオ語をはじめ東南アジアの諸言語の研究において、動詞をめぐる諸問題、とりわけ「動詞連続」は関係研究者にとって最も興味深い文法現象の一つである。その分析なくしては東南アジア大陸部孤立語タイプの諸言語理解はかなり困難であるといっても過言ではない。従来の研究では、個々の語について、「動詞連続」形にふれながらの報告はいくつかなされているものの、それもまた発展途上の段階である。まして一つの共通した「形」を網羅的に体系的に研究したものはない。

(3)協力体制

申請者は従来、個々のいわゆる機能語について、その意味機能を記述することに努めたが、やはり豊富な例文のデータ、体系的な観点の必要性を痛感していた。一方で、ラオスでの資料収集、研究協力体制が整ったことも申請に至った大きな要因である。

本研究は基本的には申請者一名で行うが、ラオス側の研究機関や研究者、そして国内においても出入力関連作業の研究補助者の協力なくしては研究の円滑な遂行はありえない。幸いラオス言語学研究所の言語学者と研究所設立以前より交流があり、信頼関係も互いに厚い。また、現地調査や研究会の拠点としたラオス国立大学と本務校との間には既に交流協定が締結されており、本研究の協力体制の内諾を得ている。特に最終年度の日本での成果報告会に向けて、2名のラオス人言語学者と密接に連絡を取り合いながら、今後続くラオ語研究体制を確立していきたい。

また国内における出入力関連作業の研究補助者は特殊技能を必要とするため、本学の大学院生や専門家の全面的な協力を仰ぎたい。

以上が研究開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究は4年間である。本研究の目的は大別して2つある。それは、上述の1に示すように、ラオ語の研究はいまだ端緒についたばかりであるので、その言語学的特徴を明らかにするためにも「1. ラオ語の研究に欠くことのできない具体的資料のデータベース化」と「2. それを利用して認知言語学という比較的新しい言語学的視点からラオ語の特徴を記述しようと試みる」ことを目的とした。

まず、ラオ語の研究環境を整えるべく、ラオ語文献のデータベース化を図る点について詳述すると、ラオ語の現代小説や雑誌などの書き言葉だけではなく、年次をおうごとにラオスで実際に話されている言葉を収集し、データベース化を行うことが目的であった。このような二方向からの収集が必要な最大の理由は、ラオ語がめまぐるしく変化する言語であることと、話し言葉は決して不規則で俗な言い方ではなく、最も適切に現時点での当該言語の言語運用に基づいた表現であると考えられるからである。現代ラオ語を検討するという観点からも現地調査によって得られる文献資料および話し言葉資料の両方を重視した。そしてその後入手した資料のデータベース化を行った。

もう一つは、認知言語学的視点からのラオ語の記述的研究を行うことを目的とした。ラオ語にはどのような「補助動詞」が存在するのか、という具体的なテーマに関して得られたデータからの例文を通して検討していくことにした。

本研究では「補助動詞」とは、「動詞+補語+補助動詞」という動詞連続の形をつくる語としている。その形態、種類、認知言語学的視点からの意味分析を通して文法的特徴の記述を試みた。認知言語学的な視点から検討するとした理由は、次のような理由に拠る。

Heine(1991)らは、認知的アプローチの中で「カテゴリーメタファー」という概念を導入して、「...>Activity>Space>Time>.....」という系列を示している。実際、ラオ語でも一つの語が動詞、補助動詞、前置詞、接続詞という具合に具体的な語彙から機能語という、いくつものふるまいを呈する語が多数あるが、このような言語現象も上述の認知プロセスによって説明可能かもしれないと考えたからである。現時点ではあくまで推測の域を出ないが、いわゆる「文法化」現象がラオ語の世界においても考えられる可能性を本研究によって示すべく、補助動詞について認知言語学的な視点からの記述を試みることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、資料そのものを海外調査によって得るため、研究方法は、主に海外調査とそれによって得られた資料による国内での研究の遂行、という形で進められた。平成 20 年度は主にラオ語資料の収集とデータベース化を行い、平成 21 年度以降はデータベース化と平行して、補助動詞の具体的な例文検討を行った。平成 22 年度および 23 年度は検討の成果を論文や学会をとおして発表した。また、特に最終年度の平成 23 年度は、ラオスの研究者と報告会を開催すると共に成果書を印刷することとした。

以下に年度ごとに具体的な方法を示す。

(1)平成 20 年度

初年度は、まず 4 年間の研究内容の説明とその具体的な進め方について、ラオスへ赴き、ラオス側の協力機関および協力者と協議した。また、そのためにこの研究の背景となった先行研究などをラオスの研究者と読む研究会をラオス国立大学で開いた。一方で、ラオスの人々の間でよく読まれている小説や雑誌を調査し、その中からデータベース化の許可が得られる文献資料を選定した。その後、現地調査によって収集できた資料を整理し、入力作業を行った。その際に、どのように入力すれば、後の補助動詞の検討がよりスムーズに行うことができるか、本務校である東京外国語大学にいるキーワード検索など、言語研究に関するコンピュータ利用に精通した研究補助者と打ち合わせを重ねた。また入力済みのデータを利用して補助動詞「khùn」「lón」について検討した。

(2)平成 21 年度

前年度に引き続きラオスで調査を行い、データベース化のための資料収集を続けた。同時に前年度作成したデータベースを持って行き、それに関連する著作権の問題などについて関係諸機関および協力者と具体的な討議を重ねた。また国内においては、収集したデータの入力を進めると同時に、完結したデータから順次、補助動詞的な語をもつ例文を抽出し、その形態と種類についての検討を始めた。なかでも前年度の「khùn」「lón」について論考を重ねた。

(3)平成 22 年度

前年度の方法を踏襲した。本年は特に収集したデータの入力作業を利用して「si?」について認知言語学的視点からの意味特徴の記述を試みた。

(4)平成 23 年度

最終年度である平成 23 年度においては、

まずデータベースをどのような形で公開できるのかを各専門家に相談しながら実現に向けて具体的な作業を行った。

また補助動詞の検討については、前年度を引き継ぎ検討結果のまとめを行った。さらにはタイのシンポジウムに備えて「yuu」についても検討した。そして最終的には報告書と報告会ができるように具体的な手配などを行った後、ラオス国立大学において研究成果報告会を開催した。これは申請当初はラオス側研究者 2 名を日本に招聘し、本研究に関する成果を各自発表する報告会を東京外国語大学で開催する予定であったが、東日本大震災や原発事故の影響で来日が断われたため、ラオス国で行った。

またデータの詳細をしるした成果書を作成した。報告書は国内外の関係研究機関、研究者に送付した。なかでもラオスをはじめとする海外研究機関への成果還元を精力的に行った。

以上が本研究の方法である。

4. 研究成果

本研究の目的は、ラオ語の研究に欠くことのできない(1)具体的資料のデータベース化と(2)それを利用して認知言語学という比較的新しい言語学的視点からラオ語の特徴を記述しよう、と試みることに特色がある。以下にそれぞれについて詳述するが、加えて東南アジア大陸部の諸言語の大きな研究課題である「動詞連続」の一つである補助動詞に関して、ラオ語については豊富なデータを利用した詳細な検討を行ったことが成果であると言える。

(1)ラオ語データベース

まず、ラオ語データベースのための資料選定という目的で、ラオスでよく読まれている書籍や雑誌などを調査した。同時に、具体的な資料収集にあたっての協力要請を含めた現地調査にかかわる課題や効率的な進め方などについて、ラオス言語学者と詳細に協議した。その後、ラオ語で書かれた現代文学の中から数冊を選定し、補助動詞的なものに着眼しながら入力作業、および内容の意味確認を行っていった。同時にラオス現代文学作品のデータベース化の許可を得た。

話し言葉収集については、ラオス映画のスク립トなどを入手し、若干の話し言葉の録音作業を試みた。なかでも 2010 年 10 月より翌年 3 月までは、ラオス側の協力機関であるラオス国立大学でラオ語の資料収集、とりわけ自然会話の資料収集、および入力作業を行う一方で、新たな試みとして、本研究の背景となった先行研究などをラオスの研究者と

読む読書会や前半2年間の現地調査によって収集できた資料を使用したラオ語についての研究会をラオスで設け、関係研究者と意見交換を行った。

最終年度は平成20年度より23年度9月までに入力した全てのラオ語データについて見直しを行った。即ちすべての資料について、孤立語タイプに見られる語彙単位、文単位の見直し、最終確認をし、データベースとして解析可能な状態に整理した(写真1)。

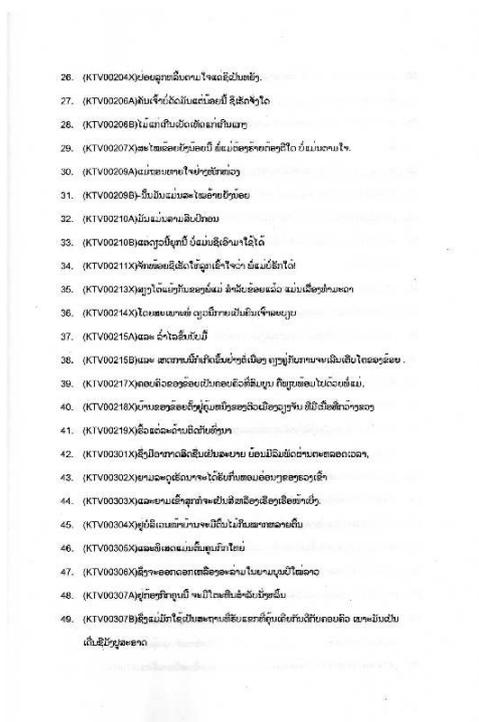


写真1. 文切り作業後のデータ

全てのデータについては出来なかったが、データ詳細を記した成果書を文学作品ごとに印刷した。それが下記5冊である(写真2)。

- ・ Siang Miang, p.76
- ・ Phanya khankhaak, p.44
- ・ Saeng aloun nay manmoak, p.89
- ・ Aathan haeng phongphay, p.157
- ・ Nithaan phuen mueang laaw lem 1., p.147



写真2. データ成果書

(2)補助動詞の検討

データベース化と並行して、入力したデータをもとに、下記の語の検討を行い、それぞれの論考について、論文や学会で発表した。

①「khùn」と「lóng」

動詞としては「khùn」は「上がる」、「lóng」は「下がる」という意味をもつ語が、補助動詞の場所に置かれた場合の主動詞との意味関係を中心に検討した。その結果、主動詞の移動性や可変性という意味素性が高ければ高いほど、「khùn」と「lóng」は単に方向性を付加する意味役割を持ち、逆に移動性や可変性という意味素性が低ければ低いほど、状況や状態そのものの変化を付加する意味役割を持つということが明らかになった。その成果を「東南アジア学」第14号に論文として載せた。その後検討をさらに進め、前年度まとめた結論に対して若干の修正を7月、東京外国語大学語学研究所定例研究会で行った。

②「si?」

アスペクト辞の一つと考えられている「si?」に着眼し、2009年度までに蓄積されたコーパス資料を使用して認知言語学的視点からの「si?」の意味を検討した。その結果、「si?」は状況把握、蓋然性(probability)認識を表す認識のモダリティであり、蓋然的把握、未実現の不確実な事柄に対して可能性があるという判断を表すマーカーであると結論した。以上の事柄を2010年7月タイ国コンケン県での「第3回 国際ラオス学会」で発表した。

③「yuu」

さまざまな文法的機能を持つ「yuu」について検討を行った。そして2011年9月にタイ国バンコクでの「第3回 タマサート大学言語学文学国際シンポジウム」でその成果を発表した。

「yuu」は文によっては直前に否定辞を置

くことができ、しかも単独で諾否疑問文を作る文末詞を後ろに置くことができるので、そのときは「動詞」であると言える。一方で動詞句の後に置かれることもある。このときは直前に否定辞を置くことも単独で諾否疑問文を作る文末詞を後ろに置くこともできない。言語運用上、明らかに直前の「動詞+補語」を修飾しているの、「動詞+補語+yuu」という一つの動詞句の中にある補助動詞とみなす。さらには「～で」「～に」に相当する場所を表す前置詞としても働く。このように統語的特徴から「yuu」の種類を整理していく。そしてこのとき「yuu」の意味は何であるのか、を検討するに当たっては、「yuu」をめぐって本来は動詞として「居る・在る」という意味を持つものが運用に関して何らかの知覚や思考、行為一般に及ぶ認知プロセスを通して意味が拡張されたものであるという、認知言語学的な視点からの検討を試みる。換言すれば、本来「居る・在る」という意味を持つ動詞が認知言語学でいうメタファーなどの現象を通して、その延長線上に関連づいたある意味を表すように転用され、その結果、動詞の持つ語彙的内容が希薄になって、補助動詞、さらには前置詞という一種の機能語に近づいている現象であると言えるのではないかと考えた。さまざまな例文に見られた多機能な/yuu/は、徐々に機能化され、脱意味化が起こっている一連の「因果連鎖」の中で節分化されたものにすぎないと思われるわけである。機能拡張されるにつれ、動詞本来の実質の意味が弱まっているものの、yuu の本義「場にとどまる」は残存していることは確かである。このような yuu の振る舞いは、機能の拡張における意味的・構文的な特長を通じて、yuu という所在動詞の文法化事例の一つであるかもしれないという可能性を示唆した。

(3)本研究の位置づけと今後の課題

国際学会やシンポジウムで、本研究のデータベース構築の様子やそれを利用した研究発表により、ラオ語研究の現状を海外の研究者と意見交換することができた。そしてより一層ラオ語資料のデータベース構築の必要性を確認することができたことは、本研究のもつ重要性と今後の研究指針を再確認できた大きな収穫であった。また、初年度よりラオ語資料の収集などにご協力いただいたラオス国立大学や国立ラオス言語学研究所の諸研究者に対して、平成 23 年 2 月にラオス国立大学文学部にて成果報告会を行った。さまざまな関心とテーマが寄せられ、引き続き同研究を協力して続けていくことを確認できた。

ラオ語のような語形変化をしない孤立語タイプでは、「形」のみからその言語特徴を

検討するには限界があり、統語論、意味論、品詞論を超えた知覚や思考や行為一般に共通の認知プロセスの知見を適用するというアプローチが言語特徴の記述に有効であるということが本研究によって示すことができたのではないかと考えている。これは国内外ではいまだかつてない視点からの研究であり、新たなラオ語研究の視座を開くものと考えている。

ただし、やり残した反省すべき今後の課題が二つある。一つは本来大量に収集すべき話し言葉データを十分に収集、データ構築できなかったこと、もう一つは当初、可能ならば得られたデータベースの web 公開を考えていたがそこまでには至らなかったことである。引き続きこれらの課題をクリアしていくように努める所存である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 6 件)

①鈴木 玲子、標準ラオ語/ay/の分布、紀要慶応義塾大学言語文化研究所、査読無、Vol.43、2012、pp.263-277

②SUZUKI, Reiko、Some Features of Southern Lao dialects、Proceedings of International Conference:Language, Literature and Culture in ASEAN、査読有、2011、pp.142-156

③鈴木 玲子、ラオ語の受身文について—thuek 文を中心に—、コーパスに基づく言語学教育研究報告、査読有、Vol.7、2011、pp.229-243

④鈴木 玲子、ラオス語教育における発音指導要領の紹介、外国語教育研究、査読無、Vol.13、2010、pp.122-129

⑤SUZUKI, Reiko、Serial verbs in Lao、Journal of Vientiane 450 years Anniversary of National University of Laos、査読有、2010、pp.49-58

⑥鈴木 玲子、ラオ語の‘khùn’と‘lón’について、東南アジア学、査読有、Vol.14、2009、pp.123-139

[学会発表] (計 3 件)

①SUZUKI, Reiko、A Study of /yuu/ in Lao、Thammasat International Symposium on Language and Linguistics、2011.9.23、Thammasat University.Bangkok,Thailand

②SUZUKI, Reiko、A Study of ‘si?’ in Lao、The Third International Conference on Lao Studies、2010.7.15.、Khongkaen University、Khongkaen,Thailand

③鈴木 玲子、ラオス語教育における発音指導要領の紹介、外国語教育学会シンポジウム、2010年3月9日、東京外国語大学、東京

〔図書〕(計3件)

- ①鈴木 玲子(編著)、ラオスを知るための60章、明石書店、p.358, 2010
- ②鈴木 玲子、ニューエクスプレスラオス語、白水社、p.156, 2010
- ③鈴木 玲子、ラオス語初級教本、東京外国語大学出版部、p.125, 2010

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 玲子 (SUZUKI, REIKO)
東京外国語大学大学院 総合国際学研究院 教授
研究者番号：40282777

(2) 研究協力者

①Paphaphanh, Bualy (パパーパン・ブアリー)
ラオス国立大学文学部ラオス語 - 広報学科学科長 教授

②Holanouphab, Sengfa (ホーラヌパーブ・センファー)
ラオス国立大学文学部ラオス語 - 広報学科学科 講師

③Sengsoulin, Bounluet (セーンスリン・ブンルート)
ラオス国立大学文学部副学部長 准教授

④Xayavong, Somsaeng (サニャウオン・ソムセーン)
国立社会科学院言語学研究所 副所長

⑤Khaminsu, Othong (カムインスー・オートン)
情報文化観光省文芸局 編集長

⑥Bounyavong, Douangdueane (ブンニャウオン・ドアンドゥアン)
作家・Dokked 出版社 社長